

# ZOCALO

## 2017 3.31

特集：橋本真之《果実の中の木もれ陽》  
公開制作 @ 北浦和公園

ZOCALO=ソカロは  
メキシコの都市の広  
場を意味するスペイン  
語。埼玉県立近代  
美術館はアートを通  
じて交流する市民の  
広場をめざしています。

### 【寄稿】《果実の中の木もれ陽》2016年覚書 橋本真之

この場所に、遠い将来という「時」があるととして、そこから現在を見るとしたら、《果実の中の木もれ陽》はどのように見えるのだろうか？という観点から、私にとって埼玉県立近代美術館でのプロジェクトの根底の意義であると覚悟して、制作に取り組んで来た。その射程を数十年から数百年、「傲慢」との誹りを怖れずに言えば、千年先の感応というものを想定していた。(注1) 公的な場所とはそういう条件の場所である。その自覚もなしに公的な場に関わるということは、軽率というものだろう。この仕事の失敗は千年の恥辱になると怖れた。遠い将来に向けて、自らの視線を具体的に据えること、これは造形行為にとって当たり前といえども、当たり前なことなのだけれども、果たして多くはロマンチックな情緒の中での言葉のようだ。

さて、具体的将来について想像すれば、《果実の中の木もれ陽》の作品空間における、樹木の成長による造形への圧迫であり、包接である。そして樹木の枯死、あるいは新たな実生の樹木の発生である。そうしたことが作品空間を変化変成して行き、将来の人々はその歪み変成する作品空間を見ながら、私たちの現在を、さらに過去の形態を想像することになる。現在の私たちが《果実の中の木もれ陽》の過去の形態を思い出し想像しながら、将来に向けて想像するように。

2000年における二度目の増殖設置のあと、長い時が経ってしまった。様々な事情が進行を妨げてきたのだが、むしろそのことが制作を大きく展開させてきた。一方で美術館の予算が全くつかなくて滞っていたのと、私の制作の内側で困難を極めていたのと両方で、16年もの時が過ぎて行った。樫と菩提樹の樹間を抜ける部分が出来上がっても、それらが現場の空間でどの様に接合することになるのかを、確実に読むことは殆ど不可能だった。

それでも、事前に途上の作品を発表しようとして運送業者に当たって見たものの、どの業者も下見に来た作品の大きさにたじろいで断ってきた。やむなく、その展示の機会を、北側の櫓につけるために展開してきたものに代えることにした。(注2) その展示の後、櫓につくための形態の展開が勢いついて、具体的接触に向かって動き出した。けれども、こちら樹幹が4メートルを超える高さで、四方に分岐した幹の間を抜けるかたちを読むことの難しさに苦しめられることになった。何度も何度も樹幹の分岐する空間を見に行き、その下で呆然と時を過ごした。

これらは設置してみて、空間全体の中でバランスに欠けるようであれば、さらに展開して空間を緊密にしなければならないと思い定めて、今回の増殖設置に臨んだ。



《果実の中の木もれ陽》東側からのクローズアップ 撮影：斎城卓

美術館の学芸課の努力によって、ついに今回の予算がついた。搬入・設置の困難を考えると、この予算計上は感謝、感激だった。制作意欲を殺されるほどに、仕事場の中も庭も滞っている様々な作品で満杯だった。運送業者には断られたけれども、馴染みの建設会社がクレーン車での搬入と高所作業のための足場の設営とを共に引き受けてくれた。

11月5日。午前8時、仕事場から美術館現場へ、学芸員の渋谷拓氏と建設会社の二人、そして彫刻ボランティアの面々の力強い協力によって搬入作業が始まった。我が老妻はビデオ撮影による記録係である。

美術館に午前中に搬入すると、その日の内にクレーンで吊り上げた部分が安定するところまでは、溶接した後に金鋸で打ちしめねばならない。そして翌日の全体を打ちしめる作業が終わるまで、そのままクレーンで吊り上げた状態にしておくことになる。その間たとえば大きな地震でもあれば、まだ強度が完璧でない溶接部分に無理がかかることになるので、クレーンで吊り上げる補助は必須である。この二日間は設置制作・公開制作も含めて最も難しい局面だった。想像の中で、何度も読み込んで来た手順だった。このクレーン作業は集中を欠くと危険を伴いかねないので、広報して公開にすることはなかったが、通りかかった見物の人々から驚きの声が上がっていた。仮の溶接が終わり、ひと叩き終わって植え込みの外から作品を見た時、制作者である私自身が感動していた。私は作品の予測を超えた強い姿を見た時、異常に笑いが込み上げてきて仕方がなかった。私は長い坑道を通り抜けた先によく出て来たようだった。やがて、「私はこのようなものを作ったのか？」という奇妙な感慨がやって来た。

1985年北浦和公園における「現代美術の祭典」での展示が最初の発表だった。あのささやかな樹木との関わりによって発生出来たところから、こんなに遠く迄やって来た。銅板を叩いて造形する鍛金技術と溶接技術が、この《果実の中の木もれ陽》の異例の展開を可能にしたのだ。長い熟考だった。樹木たちが成長してどのように対応して来ることになるのか、これまで読み込んで来たのだったけれども、今後は彼らの活躍で、この空間は「存在の充溢と上澄み」を醸成することになるに違いない。

おそらく私には、あと一手が残されているのみだろう。私は老いた。この一手こそ長い熟考と準備が必要である。

(はしもと・まさゆき / 鍛金家)

(注1) 橋本真之『造形的自己変革』美学出版2016年 参照。  
(注2) 『方法の発露2014』展(ギャラリー緑蔭館)での展示。



[写真B]



[写真C]



[写真D]



[写真E]



[写真A]



[写真F]



作業中の作者。新たに沿接した部分を打ち締める。2016年11月 撮影：斎城卓

### 橋本真之と《果実の中の木もれ陽》のあゆみ

- 1947年 埼玉県上尾市生まれ
- 1970年 東京藝術大学美術学部工芸科卒業
- 1971年 個展(ときわ画廊、東京)
- 1984年 個展(お茶の水画廊、東京)に《作品115 運動膜(内的な水辺)》出品
- 1985年 「筑波国際環境造形シンポジウム」(筑波研究学園都市)出品  
後に《果実の中の木もれ陽》となる作品《秋の陽の悦楽に》[写真A]を「現代美術の祭典」で北浦和公園に設置
- 1987年 「現代美術の祭典」で《果実の中の木もれ陽》[写真B]を北浦和公園に設置
- 1988年 「花の表現」展(当館) / 「野外の表現展'88」出品(北浦和公園)
- 1990年 「作法の遊戯」出品(水戸芸術館)
- 1992年 個展(ギャラリー天竺、東京)に《作品211 発生期の頃》出品
- 1993年 「手わざと現代」(当館)に、後に東京国立近代美術館所蔵となる作品を出品
- 1995年 「第16回現代日本彫刻展」(山口県宇部市)に《時の木もれ陽》を出品  
本作で宇部市野外彫刻美術館賞・埼玉県立近代美術館賞を受賞
- 1996年 当館で《果実の中の木もれ陽》を収蔵、北浦和公園に設置 [写真C]
- 1998年 《果実の中の木もれ陽》1回目の増殖(北浦和公園) [写真D]
- 1999年 「工芸オブジェの系譜」出品(東京国立近代美術館工芸館)
- 2000年 《果実の中の木もれ陽》2回目の増殖(北浦和公園) [写真E]
- 2002年 「現代日本工芸展—素材と造形思考」出品(マレーシア、インドネシア)
- 2003年 「アーティスト・プロジェクト1 成長する造形—橋本真之」(当館)
- 2005年 「揺らぐ日々の中に」(山口県立萩美術館・浦上記念館)
- 2007年 「工芸の力—21世紀の展望」出品(東京国立近代美術館工芸館)
- 2009年 東京国立近代美術館工芸館が《果樹園—果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》(1978-1988)を収蔵
- 2010年 「第1回金沢・世界工芸トリエンナーレ」出品(金沢市)
- 2013年 「清州国際工芸ビエンナーレ2013」出品(清州市、韓国)
- 2015年 増殖予定の《果実の中の木もれ陽》の一部を「Art Session Tsukuba 2015」に出品(つくば市) [写真F]
- 2016年 「造形的自己変革—素材・身体・造形思考」(美学出版)を上梓  
「橋本真之《果実の中の木もれ陽》これまで/これから」(当館・10月22日~2017年1月15日)  
「橋本真之《果実の中の木もれ陽》公開制作@北浦和公園」(11月15日~30日)で3回目の増殖 [裏面]
- 2017年 《果実の中の木もれ陽》の公開制作で平成28年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞  
現在、金沢美術工芸大学大学院教授